

# 葬儀記

芥川龍之介

青空文庫



離れで電話をかけて、皺くちやになつたフロックの袖そでを気にしながら、玄関へ来ると、誰もいない。客間をのぞいたら、奥さんが誰だか黒の紋もんつき付を着た人と話していた。が、そこと書齋との堺さかいには、さつきまで柩ひつぎの後ろに立ててあつた、白い屏風びょうぶが立っている。どうしたのかと思つて、書齋の方へ行くと、入口の所に和辻わつじさんと何か二、三人かたまつていた。中にももちろん大ぜいいる。ちようど皆が、先生の死し顔がほに、最後の別れを惜んでゐる時だつたのである。

僕は、岡田君おかだのあとについて、自分の番が来るのを待つていた。もう明るくなつたガラス戸の外には、霜よけの藁わらを着た芭蕉ばしやうが、何本も軒近くならんでいる。書齋でお通夜つやをしていると、いつもこの芭蕉がいちばん早く、うす暗い中からうき上がってきた。——そんなことをぼんやり考えているうちに、やがて人が減つて書齋の中へはいれた。

書齋の中には、電灯がついていたのか、それともろうそくがついていたのか、それは覚えていない。が、なんでも、外光だけではなかつたようである。僕は、妙に改まつた心もちで、中へはいつた。そうして、岡田君が礼をしたあとで、柩の前へ行つた。

柩のそばには、松根まつねさんが立っている。そうして右の手を平たいらにして、それを白うすでも挽ひく

時のように動かしている。礼をしたら、順々に柩の後ろをまわって、出て行ってくれという合図あいずだろう。

柩は寝棺ねかんである。のせてある台は三尺ばかりしかない。そばに立つと、眼と鼻の間に、中が見下された。中には、細くきざんだ紙に南無阿弥陀仏なむあみだぶつと書いたのが、雪のようにふりまいてある。先生の顔は、半ば頬ほおをその紙の中にうずめながら、静かに眼をつぶっていた。ちようど蠅ろうでもつくつた、面型めんがたのような感じである。輪廓りんかくは、生前と少しもちがわない。が、どこかようすがちがう。唇の色くちびるが黒くろんでいたり、顔色が変わっていたりする以外に、どこかちがっているところがある。僕はその前で、ほとんど無感動に礼をした。

「これは先生じゃない」そんな気が、強くした。（これは始めから、そうであった。現に今でも僕は誇張なしに先生が生きているような気がしてしかたがない）僕は、柩の前に一、二分立っていた。それから、松根さんの合図通り、あとの人に代わって、書斎の外へ出た。ところが、外へ出ると、急にまた先生の顔が見たくなった。なんだかよく見て来るのを忘れたような心もちがする。そうして、それが取り返しのつかない、ばかな事だったような心もちがする。僕はよつぽど、もう一度行こうかと思った。が、なんだかそれが恥しかった。それに感情を誇張しているような気も、少しはした。「もうしかたがない」——そ

う、思つてとうとうやめにした。そうしたら、いやに悲しくなつた。

外へ出ると、松岡が「よく見て来たか」と言う。僕は、「うん」と答えながら、うそをついたような気がして、不快だつた。

青山の齋場さいじょうへ行つたら、霽もやがまったく晴れて、葉のない桜のこずえにもう朝日がさしていた。下から見ると、その桜の枝が、ちょうど鉄網のように細く空をかがっている。僕たちはその下に敷いた新しいむしろの上を歩きながら、みんな、体をそらせて、「やつと眼がさめたような気がする」と言つた。

齋場は、小学校の教室とお寺の本堂とを、一つにしたような建築である。丸い柱や、両方のガラス窓が、はなはだみすばらしい。正面には一段高い所があつて、その上に朱塗しゆぬりの曲きょくろく緑が三つすえてある。それが、その下に、一面に並べてある安直な椅子いすと、妙な対照をつくつていた。「この曲緑を、書齋の椅子いすにしたら、おもしろいぜ」——僕は久米くめにこんなことを言つた。久米は、曲緑の足をなでながら、うんとかなんとかいいかげんな返事をしていた。

齋場を出て、入口の休やすみどころ所へかえつて来ると、もう森田さん、鈴木さん、安倍さん、

などが、かんかん火を起した炉ろのまわりに集って、新聞を読んだり、駄弁だべんをふるったりしていた。新聞に出ている先生の逸話いつわや、内外の人の追憶が時々問題になる。僕は、和辻さんにもらった「朝日」を吸いながら、炉のふちへ足をかけて、ぬれたくつから煙が出るのをぼんやり、遠い所のものを見るようにながめていた。なんだか、みんなの心もちに、どこか穴のあいている所でもあるような気がして、しかたがない。

そのうちに、葬儀の始まる時間が近くなってきた。「そろそろ受付へ行こうじゃないか」——気の早い赤木君が、新聞をほうり出しながら、「行い」の所へ独特のアクセントをつけて言う。そこでみんな、そろそろ、休所を出て、入口の両側にある受付へ分れ分れに、行くことになった。松浦君、江口君、岡君が、こっちの受付をやってくれる。向こうは、和辻さん、赤木君、久米という顔ぶれである。そのほか、朝日新聞社の人が、一人ずつ両方へ手伝いに来てくれた。

やがて、霊柩車れいきゆうしゃが来る。続いて、一般の会葬者が、ぼつぼつ来はじめた。休所の方を見ると、人影がだいぶんふえて、その中に小宮こみやさんや野上のがみさんの顔が見える。中ちゆう幅はばの白木綿しろもめんを薬屋のように、フロックの上からかけた人がいると思ったら、それは宮崎みやざき虎之助とらのすけ氏だった。

始めは、時刻が時刻だから、それに前日の新聞に葬儀の時間がまちがって出たから、会葬者は存外少かろうと思つたが、実際はそれと全く反対だつた。ぐずぐずしていると、会葬者の宿所を、帳面につけるのもまにあわない。僕はいろんな人の名刺をうけとるのに忙殺された。

すると、どこかで「死は厳肅である」と言う声が出た。僕は驚いた。この場合、こんな芝居じみたことを言う人が、僕たちの中にいるわけではない。そこで、やすみどころ 休所の方をのぞくと、宮崎虎之助氏が、椅子いすの上へのつて、伝道演説をやつていた。僕はちよいと不快になつた。が、あまり宮崎虎之助らしいので、それ以上には腹もたたなかつた。接待係の人が止めたが、やめないらしい。やっぱり右手で盛なジエステュアをしながら、死は厳肅であるとか何とか言っている。

が、それもほどなくやめになつた。会葬者は皆、接待係の案内で、斎場の中へはいつて行く。葬儀の始まる時刻がきたのであろう。もう受付へ来る人も、あまりない。そこで、帳面や香こう奠でんをしまつしていると、向こうの受付にいた連中が、そろつてぞろぞろ出て来た。そうして、その先に立つて、赤木君が、しきりに何か憤慨している。聞いてみると、誰かが、受付係は葬儀のすむまで、受付に残っていなければならんと言つたのだそつであ

る。至極もつともな憤慨だから、僕もさつそくこれに雷同した。そうして皆で、受付を閉じて、斎場へはいった。

正面の高い所にあつた曲きよくろくは、いつの間にか一つになつて、それへ向こうをむいた宗演そうえん老師が腰をかけている。その両側にはいろいろな楽器を持った坊さんが、一列にずつと並んでいる。奥の方には、柩があるのであろう。夏目金之助なつめぎんのすけのひつぎ之助の柩と書いた幡はたが、下のほうだけ見えている。うす暗いのと香の煙とで、そのほかは何があるのだからつきりしない。ただ花輪の菊が、その中でうずたかく、白いものを重ねている。――式はもう誦ずきよ経けいがはじまつていた。

僕は、式に臨んでも、悲しくなる氣づかいはないと思つていた。そういう心もちになるには、あまり形式が勝つていて、万事がおおぎようにできすぎている。――そう思つて、平気で、宗演老師の乗炬へいきよほうこ法語を聞いていた。だから、松浦君の泣き声を聞いた時も、始めは誰かが笑つていのではないかと疑つたくらいである。

ところが、式がだんだん進んで、小宮さんが伸しんろく六むつさんといつしよに、弔辞ちようじを持つて、柩の前へ行くのを見たら、急に暈まぶたの裏が熱くなつてきた。僕の左には、後藤末雄君ごとうすえおが立っている。僕の右には、高等学校の村田先生がすわっている。僕は、なんだか泣くのが外聞

の悪いような気がした。けれども、涙はだんだん流れそうになってくる。僕の後ろに久米くめがいるのを、僕は前から知っていた。だからその方を見たら、どうかなるかもしれない。

——こんなあいまいな、救助を請うような心もちで、僕は後ろをふりむいた。すると、久米の眼が見えた。が、その眼にも、涙がいつぱいにたまっていった。僕はとうとうやりきれなくなつて、泣いてしまった。隣にいた後藤君が、げげんな顔をして、僕の方を見たのは、いまだによく覚えている。

それから、何がどうしたか、それは少しも判然しない。ただ久米が僕の肘ひじをつかまえて、「おい、あっちへ行こう」とかなんとか言つただけは、記憶している。そのあとで、涙をふいて、眼をあいたら、僕の前に掃きだめがあつた。なんでも、斎場とどこかの家との間らしい。掃きだめには、卵のからが三つ四つすててあつた。

少したつて、久米と斎場へ行つてみると、もう会葬者がおおかた出て行つたあとで、広い建物の中はどこを見ても、がらんとしている。そうして、その中で、ほこりのおいと香かほのにおいが、むせつぽくいっしょになつている。僕たちは、安倍さんのあとで、お焼し香こうをした。すると、また、涙が出た。

外へ出ると、ふてくされた日が一面に霜しもどけの土を照らしている。その日の中を向こう

へ突きつて、休所へはいったら、誰かが蕎麦そば饅頭まんじゅうを食えと言ってくれた。僕は、腹がへつていたから、すぐに一つとつて口へ入れた。そこへ大学の松浦先生が来て、骨上げこつあのことか何か僕に話しかけられたように思う。僕は、天とうも蕎麦饅頭もしやくにさわつていた時だから、はなはだ無礼な答をしたのに相違ない。先生は手がつけられないという顔をして、帰られたようだった。あの時のことを今思うと、少からず恐縮する。

涙のかわいたのちには、なんだか張はり合あない疲労ばかりが残った。会葬者の名刺を束にする。弔電や宿所書きを一つにする。それから、葬儀式場の外の往来で、柩車の火葬場へ行くのを見送った。

その後は、ただ、頭がぼんやりして、眠いということよりほかに、何も考えられなかった。

(大正五年十二月)

# 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utiyaana

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 葬儀記

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>